はくぶつかん

HIRATSUKA CITY MUSEUM　'87　8月号

8月の行事

8月

4－5		自然観察入門講座（天体観察）
6	木	星を見る会（月と土星）
6－8		サマーセミナー
9	日	特別講演会（大山の信仰と歴史）
12	水	大山見学会
13	木	体験学習（拓本と裏打ち教室）
15	土	古文書講読会
20	木	星を見る会（夏の星座と土星）
22	土	石仏を調べる会
28	金	自由研究相談会
30	日	相模川を歩く会

• 夏期特別展（特別展示室）

－30まで　大山の信仰と歴史展

• 企画展（寄贈品コーナー）

1－9／22　夏の昆虫展

• プラネタリウム

－30まで 銀河360度

9月

5	土	古文書講読会
5	土	土曜観察会（相模川川原）
6	日	体験学習（巣箱つくり）
12	土	石仏を調べる会

・プラネタリウム

5－10／25 星座って何だ

○ 体験学習「巣箱をつくろう」

日時：9月6日（日）午後1時－4時

場所：博物館科学教室

内容：シジュウカラ用の巣箱をつくる

申込み：8月25日までに往復ハガキで。

多数の場合は抽選で20名まで。

○ プラネタリウム「銀河360度」

• 投影時間

水・木曜日　午後2時

土曜日　午後2時・3時30分

日曜日　午前11時・午後2時

開場は10分前、観覧券は当日発売します。

• 団体の予約

水・木・土曜日の午前11時にご覧になれます。詳しくは博物館管理係までお問い合わせを。

夏期特別展「大山の信仰と歴史」

相模平野から秀麗な姿として望むことのできる大山は、私たちにとってもっともなじみ深い山の一つといえます。日々仰ぎ見る大山は、平塚市歌ばかりでなく、市内の小中学校などの校歌にも取り上げられ、その名を知らない人はないといえましょう。

今回の特別展では、このように身近に感じている大山の信仰や歴史について、その一端を紹介しました。大山信仰の歴史は古く、すでに平安時代には宗教的な組織が整えられ、さまざまな活動が行われていたと考えられます。１０世紀初めに成立した『延喜式』神名帳には「阿夫利神社」が相模国１３社の１社としてあげられています。

鎌倉幕府の記録として知られている『吾妻鏡』には、大山寺のことがしばしば見えています。また、大山の山頂からは小型の泥仏や銅製五重塔などが出土し、山頂で何らかの宗教的な活動が行われたのは確実です。

大山信仰の歴史をみていくと、江戸時代初期までは時の為政者と密接な関係をもち、信仰をうけるとともに庇護されていたのがわかります。『吾妻鏡』の記載はそのことをよく示しています。今回の展示資料の中には、徳川家光が寄進した釣灯籠と梵鐘の一部がありますが、これらも江戸幕府の信仰と庇護を示すものです。

江戸時代初期までの資料は、ほとんどが大山と為政者との関係を示す資料です。庶民信仰の姿をうかがわせる資料は、江戸時代中期から多くなっています。大山は江戸時代末に編さんされた『新編相模国風土記稿』には、「（石尊社の）例祭６月２７日より７月１７日迄、２０日の間なり、其間諸国より参詣の者甚多し、此山頂は常に山外の人、登る事を禁ずれど、祭礼中は許して社前に至らしむ（祭礼中も女人は禁ぜり）」とあり、多くの参拝者があったのがわかります。

大山図

ここで注目されるのは、今と違って普段は山頂までの登拝は許されてなかったということです。阿夫利神社下社から山頂に登る本坂の入口には現在も木戸が設けられています。かつては普段は、

この木戸が閉じられ、祭礼になると江戸のお花講の人たちの手に依って木戸が開けられることになっていました。お花講は、現在は奉幣講という名称に変わっていますが、その伝統は受け継がれています。展示資料のなかの奉幣講弁当箱は、この講中が使うもので、箱には元禄の年号が見えます。

庶民の大山登拝は大山講という組織で行われるのが一般的です。この大山講の広がりを阿夫利神社の『開導記』によってみていくと、明治時代の初めには関東甲信越、さらに静岡、福島県までにもひろがっています。大山講の結成については十分明かではありませんが、これを積極的に押し進めたのは先導師だといわれています。先導師というのは、江戸時代までは御師と呼ばれ、各地をまわって信者を獲得したわけです。

今回の特別展では、館蔵の「大山寺縁起」を展示しました。この資料は現存する「大山寺縁起」のなかで、記年のあるものとしてはもっとも古く、一般に公開されるのは初めてです。（小川）

博物館にはなぜ虫の標本があるか

8月の寄贈品コーナー「虫のいろいろ」に寄せて

みなさんは、博物館に収蔵室という部屋があるのをご存知ですか。平塚には5つの収蔵室があって、美術・民俗・歴史・地質など分野ごとに、いろいろな資料が保存されています。そのうち一番広い第二収蔵室に動植物の標本と、発掘された考古資料がおさめられています。生物の資料には、押し葉になった植物、剥製になった鳥や獣、ホルマリンの液浸標本になった魚などいろいろなものがありますが、その一つが昆虫標本です。現在、平塚の博物館には約１００箱の標本箱に約１万点くらいの昆虫標本が保存されています。その一部を、８月の寄贈品コーナーで紹介してみました。

昆虫の標本を見ると、昔やった昆虫採集を思い出してなつかしく感じる方もいるでしょう。針にさしてかわいそうだと思う人もいるでしょうし、こんなに採集するのは自然をこわしているのではないかと心配する方があるかもしれません。そこで、博物館にはなぜ虫の標本が必要なのか、聞いていただきたいと思います。

●記録には証拠が必要

どこに、どんな種類の動植物が生息しているかを知ることはとても大事なことです。そうした記録がきちんとしていないと貴重な生物のいる森や湿地が、気づかれないままに開発によって失われてしまうかもしれません。また、過去のしっかりした記録が残っていれば、最近の自然の変化やその原因について

博物館にはなぜ虫の標本があるか

（標本箱のマークより）

くわしく調べることもできるからです。しかし、文字だけで「００００ムシがいました」と記録されていても、それが本当に確かなことなのか、後から確かめることはなかなかできません。ところが、標本が保存されていれば、その記録を確実な証拠によって裏づけることができるのです。

●昆虫の分類はわからないことだらけ

日本にいる動植物はもうすっかり調べがついて図鑑を調べればその名前は簡単にわかるだろうと思っている方も多いでしょう。ところが鳥や獣などの脊椎動物や、種子植物、シダ植物などを除くと、分類がまだ未完成で正式な名前がつけられていない生物はものすごくたくさんあるのです。例えば、ツチカメムシというカメムシのなかまは、平塚に約１０種類の標本がありますが、湘南昆虫研究会の槐真史さんのお話だと日本の図鑑にちゃんとのっているのは、そのうち６種類だけだそうです。そうした分類をすすめるためには、研究の材料として、どうしても標本が必要になるのです。

●自然のしくみを知るために

「糞分析」という言葉をご存知ですか。鳥や獣の糞を水で洗って、消化されなかった食べ物の破片を選び出し、その動物のメニューを調べるという方法です。キツネやタヌキの糞であれば、そのなかに必ず昆虫の羽や足などが入っています。そうした体の一部から昆虫の名前を知ることはなかなか難しく、図鑑はほとんど役に立ちません。ところが標本があれば、それと直接並べて比較することによって、その正体を探ることが可能です。つまり昆虫の標本は、食物連鎖という自然のしくみを知るうえでも必要なものなのです。

このように昆虫の標本は、自然をより深く知るために、博物館に保存されているのです。

しかし、昆虫の世界を知る手段は、採集して標本を作ることだけではありません。野外でその生きている姿を観察することにも、大きな楽しみがあります。みなさんが虫にきょうみがあったら、まず生きた生活に親しむようにしてください。そのなかで、記録のため、分類のためどうしても必要があれば、標本を作ることもよいでしょう。でも、ただきれいだから、面白いからという楽しみだけのための採集はやめてください。（浜口）

「はくぶつかん」 Vol. 12 No. 5 通巻 132 号 印刷 平塚市総務部総務課文書係 ○4000
発行 平塚市博物館 〒254 平塚市浅間町12－41 Tel.33-5111